

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 江畑 冬生

『サハ語名詞類の研究 ―接辞法と統語機能を中心に―』は、シベリア東部のサハ共和国（ロシア連邦）で話されるチュルク系言語のひとつであるサハ語（ヤクート語）における、動詞以外の主要な語類（本論文では名詞類と呼ばれる）の形態的・統語的特徴に基づく分類について、形式以外の基準に依ることを極力排除しつつ、かつ可能な限り網羅的に検討した労作である。

第1部（第1章から第4章）では、サハ語の概説、屈折や派生における形態音韻論的交替の解説の後、本論文で扱われる全ての派生接尾辞（44種）と屈折接尾辞（164種）が詳しく説明される。本論文の中心的テーマであるサハ語の名詞類の検討のために必要な基礎的データが余すところなく提示される。

第2部（第5章から第9章）では、従来よりサハ語で用いられている、名詞、形容詞、副詞への3つの語類への分類が、サハ語の実態を捉えていない点が鋭く指摘される。第1部で見た形態的特徴とともに、ここでは特に統語的特徴に重点を置いて論じられる。取り上げられる統語的特徴は、名詞句として働くことができるかどうか、連体修飾要素になれるかどうか（なれる場合はさらに、修飾される要素に所有接尾辞が必要かどうか）、そして副詞句として働くことができるかどうか、という3点である。これらの基準に厳密に従いながら、従来サハ語の研究で名詞（代名詞、指示詞、数詞を含む）、形容詞、副詞とされてきた語は、3分類よりも8分類されるべきであることを主張する。

第3部（第10章から第12章）では、筆者が「無人称単数主格形」と呼ぶ、何の屈折接尾辞も伴わない語幹そのままの語形と、接尾辞 **-LEEx** の付加した句について扱う。「無人称単数主格形」は、対格接尾辞を伴う語や、分格接尾辞を伴う語と同じように、目的語となることができる。また、二次述語と呼ばれる付帯状況を表す副詞句を形成することができる。このように、「無人称単数主格形」は名詞類に属する語のさまざまな語形の中でも、もっとも多機能な語形であると主張する。また、第2部の結論として提示された名詞類の8分類の基準となった統語的特徴が、語だけでなく句の統語機能の分類に使えることを指摘した上で、**propriative** の接尾辞 **-LEEx** が主要部の語に付加した句は、すべての統語機能を持つことを明らかにする。

第4部（第13章）では、本論文の主張がまとめられ、サハ語の特徴を記述するためには、名詞、形容詞、副詞をひとまとめにした上で8つに下位分類すべきこと、名詞類に属する語は多機能であるが、その多機能性は「無人称単数主格形」にもっとも顕著に現れていることを再度主張して終わる。

伝統的品詞分類に基づくサハ語研究に対する批判が随所に見られるものの、むしろ伝統的品詞分類をある程度前提としながら、膨大なコーパスと調査データを用いて問題点を明示し、それらの解決策を提示している点に、本論文の大きな貢献があると考えられる。サハ語の名詞類の分類について、これまで書かれたもっとも詳細な研究であることは明らかであり、今後本論文を超える研究はなかなか現れないであろう。

以上の理由により、審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに十分値するものと判断する。